論文概要書

亀ヶ岡式土器成立期の研究

－東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式－

小　林　圭　一

序　章

縄文時代の東北地方には、亀ヶ岡式土器と称される、精緻を極め華麗な装飾を持った土器が分布している。縄文時代の最後を飾る土器で、多様な器形と薄手で精巧な造作、朱漆等による彩色、磨消縄文や半肉彫的手法による複雑で繊細な文様描出など、その特徴を挙げれば枚挙に暇がないほど多彩であり、この土器が製作され、使用された時代に醸成された文化的な総体が、「亀ヶ岡文化」と称されている。亀ヶ岡式土器に象徴されるように、高度な技術に裏打ちされた豊かな物質文化の様相が窺われ、文化的高揚が著しく、活力に溢れると共に、遮光器土偶等の祭祀具類の発達から、呪術・祭祀性の強い社会が形成されていたと推測されている。

本論は、その成立期に当たる大洞B式土器と同 BC 式土器の型式内容を多方面にわたって検討し、それ等の年代的変化と地域的差異を明確にし、年代的組織の再編成を試みたものである。その目的は、以下の３点に集約される。

① 芹沢長介氏が提唱した大洞B・BC 式を統合した「雨滝式」を批判的に検討し、亀ヶ岡式成立期の土器の細別の階梯を明示することで、閉塞状況にある該期土器研究に新たな指針を提示する。

② 縄文時代晩期の年代交差決定の指標である亀ヶ岡式土器の型式内容を明確にし、広域編年網の構築に資する。

③ 亀ヶ岡文化を醸成した社会構造に対し、土器型式の分析を通したアプローチを志向するが、その前提として社会的含蓄を深めるための基礎資料の蓄積を図る。

上記した目的に向けての基礎的作業に徹したのが、本論の諸章で示した亀ヶ岡式土器の分析である。亀ヶ岡式土器は多様な器種や文様要素で構成されており、種々の属性の消長とそれ等の組み合わせから、型式変遷の区分が求められる。多様な属性の中には、時間軸において細かな変化を遂げるものもあれば、複数型式にわたって連綿と存続するものも少なくない。また一つの属性が単一の型式を区分するメルクマールになり得るとは限らず、複数の有力な属性が同時に置換する例も稀である。このような多様性と複雑さが相俟って、亀ヶ岡式土器の理解を困難なものにしている。従ってそれぞれの属性の消長を跡づけ、属性同士の対応関係や特定器種との結び付きといった規則性を追求することが、型式区分を行う上での重要な検討課題となっている。本論ではこの方針に沿って、亀ヶ岡式成立期の土器を構成する多様な要素に着目し、その生成・変遷・消滅の過程を跡づけ、型式区分の提示を試みた。このような基礎的作業を積み重ねることで、複雑さに満ちた亀ヶ岡式土器の問題を解きほぐす糸口が得られるものと確信する次第である。

本論は、亀ヶ岡式土器成立期に当たる大洞B式土器と同 BC 式土器を研究の対象とし、2002 ～ 09 年にかけて執筆・発表した論文 13 編と、序章と終章から構成されている。更に 13 編の論文は、問題の所在の明確化に主眼をおいた第Ⅰ部、特定の器種として注口土器を研究した第Ⅱ部、大洞B・BC 式土器の個別研究である第Ⅲ部に類別される。そのうち本論の中核をなすのが、注口土器を基軸に型式区分の指針を示した第５章、大洞 B2・BC1 式の細分を考察した第９章、大洞 BC 式期の宮城県北部の地域社会を考究した第 10 章である。

亀ヶ岡式土器は、多様な器種から構成される点に特徴があるが、これ等の土器は製作の精粗より、粗製土器と精製土器に二分される。前者は深鉢形土器と鉢形土器で、日常的な什器として多量に製作・使用されている。一方後者は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、皿形土器、壺形土器、注口土器、香炉形土器の７器種に大別されるが、良質の粘土が用いられ、形状の変化が多様で、装飾性に富むことから、実用的な器種ではなかったと見られている。冒頭に掲げた亀ヶ岡式土器の特徴は後者を指示したものであり、本論では精製の深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器を主な分析対象とした。その中でも注口土器は、変化の過程を鋭敏に示す器種として型式区分の指標に位置付けられ、関連論文３編を集成し第Ⅱ部とした。

第Ⅰ部　大洞Ｂ・BC式土器研究の問題の所在

第Ⅰ部では、亀ヶ岡式土器成立期に当たる大洞Ｂ・BC 式土器研究の現状と課題を整理し、問題の所在を明示した４編の論文から構成されている。

第１章　亀ヶ岡式土器成立前史－瘤付土器の概要－では、亀ヶ岡式土器の形成基盤である東北地方の縄文時代後期後葉の瘤付土器について概観した。瘤付土器は器面の瘤状小突起に特徴付けられ、東北一円に広がりを有するが、その生成・発展・消滅の過程を宮城県内の資料をもとに検討すると共に、その分布域や他地域との併行関係、^{14}Ｃ年代測定データ等を解説し、当該土器研究の現状と課題の整理に努めた。

第２章　東北中部の晩期初頭をめぐる問題の所在では、山形県高瀬山遺跡から出土した装飾深鉢２例を定点の資料として、東北中部における縄文時代晩期初頭大洞 B1 式を考察した。同例は大洞 B1 古式の指標に相応の資料であり、^{14}Ｃ年代測定が実施され、その測定値は晩期開始期の基準年代（BC1250-1260 年）として一般に流布している。しかし、型式学的な検討は等閑に付された状況にあり、本章では構成要素について多岐にわたる検討を加え、晩期最初頭となる編年的位置の論拠を提示した。また、仙台湾周辺の貝塚・遺跡の成果を通じて、後期末葉金剛寺 2b 式との差異を明確にし、三叉文の生成過程や大洞 B1 式の細分の見通しを論究すると共に、学史的資料である「滋賀県滋賀里遺跡出土深鉢」（後期末葉）と「東京都小豆沢（あずさわ）貝塚出土深鉢」（晩期初頭）を再評価し、東北中部との併行関係から、広域編年に対する理解を深化させた。

第３章　東北北部の晩期初頭をめぐる問題の所在では、磯崎正彦氏により報告された「十腰内遺跡第Ⅵ群土器」と、林謙作氏により提唱された「山井下層式」の検討を通して、東北北部の晩期初頭大洞 B1 式の型式内容を考察した。東北北部の大洞 B1 式は、入組帯状文の装飾深鉢や無文の壺形の注口土器に特徴付けられるが、後期末葉（瘤付土器第Ⅳ段階）からの漸進的な変化が看取され、後期末葉～晩期初頭にかけての精製土器は、薄手・小型化の道程にあり、三叉文が現出する。亀ヶ岡文化の中心地域である馬淵川・新井田川流域では、一括性の高い事例から、駒板遺跡例→「山井下層式」→道地Ⅲ遺跡例→水吉Ⅵ遺跡例の変遷の階梯が抽出される。同様の階梯は東北北部に広く認められ、瘤付土器第Ⅳ段階→大洞 B1 古式→同 B1 新式→同 B2 式の変遷の跡づけが可能である。特に大洞 B1 新式期の該域には、指標となる特有の台付鉢が盛行しており、また注口土器も独立した器種として確立する。以上のように東北北部の大洞Ｂ式は、東北中部に準じた細分が可能であり、

晩期初頭に関しては芹沢長介氏の「雨滝式」を否定的に捉えざるを得ない。

第４章　「雨滝式」をめぐる問題の所在では、山内清男氏による大洞Ｂ・BC 式の型式内容の再確認と、芹沢長介氏により提唱された「雨滝式」の学史的意義の確認に主眼をおき、近年の大洞 BC 式をめぐる研究の現状と課題を整理した。特に「雨滝式」は、大洞Ｂ式と同 BC 式を統合した型式として設定されたが、それ以前に過渡的型式として設定された経緯がある。また同氏の大洞 C1 式は同 BC 式を内包しており、「雨滝式」と共に再編する必要がある。「雨滝式」の設定は、大洞 BC 式に対する層位的検証の欠如と文様中心の変遷観に対する不信感に根ざしており、以降の研究を土器組成の明確化と層位的検証に向かわせてきたと言っても過言ではない。しかし芹沢氏の疑義は、未解決のまま今日的課題として残されてきており、本章では「雨滝式」を検証するため、東北北半の大洞 BC 式の一括性の高い資料を集成し、個々の事例について検討を加えた。その結果大洞Ｂ式と同 BC 式は分離され、更に BC 式は BC1 式と BC2 式に細別される公算が高く、晩期初頭と同様に「雨滝式」の否定に確信を深めるに至った。しかし入組三叉文施文と羊歯状施文の土器の共伴は否定できず、「雨滝式」の根拠の一端を追認した。筆者は両文様の併存した過渡的型式を大洞 BC1 式に比定している。

第Ⅱ部　縄文時代晩期注口土器の研究

第Ⅱ部では、縄文時代晩期前半の注口土器の型式変化を考察した３編の論文から構成されている。

第５章　東北北半における縄文時代晩期前葉の注口土器では、縄文時代晩期亀ヶ岡式土器の象徴的な器種である注口土器の内、その成立期の型式変化について、東北北半（青森・岩手・秋田県）の資料を基に考察した。亀ヶ岡式注口土器は後期後半の壺形土器に系統的な脈絡を有しており、晩期になって独立した器種として確立し、系統立った変遷を示している。変化の過程を鋭敏に示す器種として、型式区分の指標としての役割を担っており、本章ではその型式組列の提示を試みた。これまで晩期前葉大洞Ｂ・BC 式の編年研究は、両型式を統合する「雨滝式」の問題をはらんで、閉塞した状況にあった。そこで注口土器の型式変化を、遺構内の一括資料と型式学的検討を通して考察することで、後期最終末から大洞 BC 式までの間に、大枠で８階梯、細別で 10 階梯に細分される見通しを提示し、該期の型式編年研究の指針を企図した。型式区分に当たっては、形態変化や文様帯構成、文様等の諸属性の系統性を重視したが、大洞 B1 新式期に亀ヶ岡式注口土器の母体が形成され、同 B2 古式期にＡ・Ｂ両類の組み合わせが確立し飛躍的発展を遂げたことを明確にし、また入組三叉文と羊歯状文が併存する過渡的型式としての大洞 BC1 式を積極的に評価し、「雨滝式」を否定的に捉えた。

第６章　縄文時代晩期初頭注口土器の一様相では、青森県沢山遺跡から出土した大型注口土器の検討を通して、東日本に広く分布する縄文時代晩期初頭の注口土器を考察した。沢山遺跡出土の大型注口土器は、注口土器Ａ類（３段構成）に属し、縄文時代晩期では最大の器高（推定 32 ㎝）を誇る優品であり、形制や文様等の特徴から、晩期初頭大洞 B1 古式に位置付けられる。該期の注口土器Ａ類は無文が通例であることから、有文の同例は特異な土器と評価される。しかし個々の属性を分析すると、同例が偶発的に生み出された

と見るよりは、後期末葉～晩期初頭にかけて、東日本に広域的に分布した注口土器の文脈に則った所産であると考えられ、特に大洞 B1 古式の注口土器C類（壺形の注口土器）との関連が強く、体部の形制や文様については、同C類の内容が写し込まれたと理解される。また口縁部や注口部の特徴においても、該期の注口土器との関連性を有しており、総体としては特異でも、構成される属性には系統的な展開が想定される。

第７章　東北中部における縄文時代晩期前葉の注口土器では、山形県宮田（みやでん）遺跡と釜淵C遺跡出土の注口土器の検討を通して、東北中部における大洞 BC 式の注口土器B類（２段構成）の様相を考察した。該域の注口土器B類には、「渦巻文」と「Z字文」の２系列が併存している。共に大洞 B2 式の上下で入り組む菱形文や矩形文様を母体として同 BC1 式に生成し、後続の同 BC2 式の段階に隆盛を極めたが、前者が同式に消失したのに対し、後者は大洞 C1 式古段階まで継続しており、終焉の経過には差異が存する。特に渦巻文系列は分布が東北中部に限られ、規格性が強いことから、該域を表徴する文様系列と位置付けることができる。一方Z字文系列は、東北北部との文様の共通性が認められるものの、東北中部では体下半部の磨消文様や頸部下端の文様帯が展開せず、正面突起も低調といった差異が指摘される。

第Ⅲ部　大洞B・BC式土器研究　各 論

第Ⅲ部では、大洞B式と同 BC 式土器についての論文６編を配し、器種毎の変化や土器を構成する諸属性の消長を考察することで、大洞B・BC 式土器の細別の確定化に努めている。また他地域との年代的関係を考究し、亀ヶ岡式土器を基軸とした広域編年案の提示を試みている（第 13 章）。

第８章　大洞B式「ノ字文」の系譜では、東北北半の縄文時代晩期初頭大洞B式に特有の「ノ字文」の変遷について、型式学的検討を試みた。同文様は大洞 B1 新式に現出し、同 B2 式に盛行し、同 BC1 式で姿を消す。体部文様帯下端に一貫して存し、器形に規定された文様であり、系統立った変遷が指摘される。また分布は東北北半に限定され、地域性の表徴となる属性であり、ほぼ同時期の注口土器の口縁部（口頸部）や注口部直下、また遮光器土偶の前額部にも同様の文様が施され、相関性が窺える。このように「ノ字文」は、時間的・空間的に限定された属性であり、型式区分の指標として有用である。

第９章　岩手県曲田Ⅰ遺跡ＥⅢ－011住居跡出土土器の再検討では、岩手県八幡平市（旧安代町）曲田Ⅰ遺跡ＥⅢ－ 011 住居跡から出土した縄文時代晩期前葉の土器の検討を通して、大洞 B2・BC 式の細分を考察した。同住居跡の埋土からは、入組三叉文と羊歯状文が施された復元土器が多量に出土し、大洞B式と同 BC 式を統括する「雨滝式」の例証として、大きな問題を提起している。しかし出土状況のみが強調され、、共時性について論議が尽くされたとは言い難いのが実情である。同住居例の編年的位置をめぐっては、その一括性を重視するのか、混在と見なすのか、また大洞 B2 式や同 BC1 式をどう規定するのか、時間幅がある程度限定されるにせよ合意を得るに至っておらず、その評価は未だ流動的であると言わざるを得ない。そこで同住居例が限られた時間幅（大洞 B2 新～同 BC1 式）の混在資料であるとの前提に立って、口端の形状、（口）頸部文様（入組三叉文・羊歯状文・C字文）、文様帯構成を中心に型式学的検討を試みた。その結果、入組三叉文系土器は

大洞B2新式、羊歯状文系土器は大洞BC1式に主体があり、C字文系土器は両型式にわたる根拠をそれぞれ明示した。大洞 BC1 式は従前の大洞B式と同 BC 式を繋ぐ過渡的型式として設定され、羊歯状文が成立する一方、入組三叉文も併存する。鉢類においてはⅡ a 文様帯や旧Ⅱ c 文様帯の発達に特徴付けられ、口端には珠紋縁やB突起が盛行する。

第10章　大洞BC式に固有の「入組三叉文高坏」についてでは、晩期前葉大洞 BC 式期の宮城県北部に特有の台付浅鉢である「入組三叉文高坏」について、多岐にわたる型式学的検討を試みた。当該高坏は口縁部に入組三叉文の文様と装飾的な高台に特徴付けられ、分布域は北上川下流域の湖沼地帯（仙北湖沼地帯）に限定される。形状から強く内彎したA類と、内屈して稜が形成され体部が直線化したB類とに区分され、前者から後者への型式変化が看取されており、東北中部の後期末葉に特徴的な黒色磨研の台付浅鉢の系譜を引き、大洞 BC 式期に地域的偏向が強まって確立した器種類型と見ることができる。仙北湖沼地帯に個性的な土器群が製作された背景には、共通した生業基盤に立脚した社会が存立していた可能性が指摘され、湖沼地帯といった比較的同質の地理的環境下にあって、水鳥狩猟や淡水産資源に大きく依存した生業形態が、社会的紐帯を強固なものとし、斉一性のある地域相を築き上げて行ったと考えられる。このように入組三叉文高坏が、文化的領域を表徴する土器であった可能性を指摘した。

第11章　縄文時代晩期初頭に固有の「眼鏡状突起」についてでは、縄文時代晩期初頭（大洞B式）の東北中部～東関東にかけて認められる「眼鏡状突起」を持つ土器を集成し、その特徴を明示した。同突起は、環状の粘土紐を貼り合わせ摘み出した形状の突起で、１単位の正面性を有している。張り出しが弱く、懸垂したり把手とするには不適切で、装飾突起であったと考えられる。資料数は限られるが、東北中部では大洞 B1 式の台付浅鉢、東北南部では大洞 B1 ～ B2 式の椀形の浅鉢、東関東では大洞 B1 ～ B2 式期の鉢形土器に、同突起が貼付される傾向が看取され、型式区分の指標と見なすことができる。また抽象的な形状で、正面性を有することから、人面もしくは動物意匠を表した象徴的な装飾であった可能性を指摘した。

第12章　大洞B2式磨消文様の一類型－「川原類型壺形土器」の文様分析－では、青森県川原（かわら）遺跡出土の壺形土器を類型化して、大洞 B2 ～ BC1 式にかけての磨消縄文の文様の消長を考察した。「川原類型壺形土器」は複雑な曲線文様から構成されており、一見しただけでは文様の原理を理解するのが困難である。しかしネガ文様の楕円形区画と錨形モチーフに着目すると、規則的な構成を取っており、特に「ノ字文」という属性から、大洞 B2 ～ BC1 式の範囲に時期を特定することが可能である。本類型は大洞 B2 式に生成・盛行し、同 BC1 式に衰退・消滅の経過を辿る。分布も東北北半に特定され、時間的・空間的に限定された壺形土器として、「ノ字文」と一体の関係にあったことを指摘した。

第13章　東海・近畿地方における縄文時代後期後葉～晩期前半の東北系土器では、東北地方の縄文時代後・晩期土器研究の視点から、東海・近畿地方出土の東北系土器の検討を通して、該域の土器型式との年代的関係、取り分け後・晩期の境界の問題と大洞 BC 式の細分の問題について考察した。前者については、東海地方における後期最終末瘤付土器第Ⅳ段階の欠如を取り上げ、愛知県馬見塚遺跡の資料の中にその可能性を指摘した。後者については、大洞 BC 式細分の現状を整理し、大阪府錦織南（にしごおりみなみ）遺跡と恩智（おんち）遺跡の編年的位置から、「篠原式中段階－雷Ⅱ c 式－大洞 BC2 式終末段階－」の併行関係を指摘した。

終　章

上記した 13 編の論文を通して、大洞B・BC 式及びその前後の型式内容を多岐にわたって検討してきた。本論では後期末葉～晩期前半にかけて、瘤付土器第Ⅳ段階（後期末葉）→大洞 B1 古式→同 B1 新式→同 B2 式→同 BC1 式→同 BC2 式→同 C1 古式→同 C1 新式の変遷を指摘したが、大洞 BC2 式と同 C1 古式の間に大洞 BC2 式終末段階が介在し、注口土器については更に細かな階梯に区分されることにも論及した。

終章では、上記の区分に則して、東北北部の馬淵川・新井田川流域と、東北中部の宮城県北半について、土器型式の変遷を詳細に検討したが、後者には大洞 BC2 式終末段階の抽出が困難であるものの、両地域でほぼ同一歩調の変遷経過を辿ることを確認した。しかし詳細に見てみると、地域的差異が存しており、在地的な器種類型と広域的な器種類型の組み合わせから構成されるのが、亀ヶ岡式土器の内実であることを明示してきた。特に大洞 BC2 式以降、東北北部では口縁部が短く外折した半精製の台付鉢が盛行するのに対し、東北中部では平底で口頸部が直上乃至は内傾した鉢形土器が盛行しており、地域的差異が顕在化する。一方大洞 C1 新式では、高坏形・椀形土器を含む浅鉢形土器に共通性が認められ、広範囲の拡がりが指摘される。

本論の中で、大洞B式土器の検討を通して問題にしたのは、後期と晩期の境界の明確化と、大洞 B1 式と同 B2 式の細別の確定化である。前者については一括性の高い資料と型式学的検討から、地域間で通有となる指針の提示を試みてきた。しかし後期の側からの要素に着目して系統を追求すれば後期からの連続性が、また晩期の側から追求すれば晩期との連続性が目に付き、後期と晩期の境界の設定は困難を極めているのが実情である。また大洞B式の細別については、大洞 B1 式を二分し、大洞 B1 古式→同 B1 新式→同 B2 式の３階梯の変遷を提示してきた。しかし型式変化は漸次進行しており、大洞 B1 古式と同 B1 新式を区分する十分な根拠の明示には至らなかった。

大洞 BC 式土器の検討を通して問題にしたのは、大洞 BC1 式と同 BC2 式の細別の確定化である。前者は入組三叉文と祖型的な羊歯状文が併存する段階で、東北北部では旧Ⅱ c 文様帯やⅡ a 文様帯が展開する。一方後者は羊歯状文が盛行し、新生Ⅱ c 文様帯が発達する。更に大洞 BC2 式にはその終末の段階が措定され、大洞 C1 式土器についても新古に二分される見通しを示してきた。しかし東北全域に通有の型式とするには、まだ時間を要することになる。

大洞B式と同 BC 式の細別を志向したということは、取りも直さず芹沢長介氏の「雨滝式」を否定的に捉えたことを意味する。当該土器について、一括性の高い資料の検討と型式学的検討を通して検証したが、「雨滝式」は少なくとも４型式（大洞 B1 新・B2・BC1・BC2 式）に再編される内容であることを追認した。しかし入組三叉文施文の土器と羊歯状文施文の土器の共伴は否定できず、ある時期併存の関係にあったことは確実であろう。その意味で、芹沢説にも一理あることは認めざるを得ない。筆者はその段階を大洞 BC1 式と理解するが、同式の入組三叉文を詳細に観察すると、三叉文の主軸線が伸長したり、逆に短小となり、密着する傾向が見られ、陽刻部を浮き出させるための陰刻文様へと変容している。陰刻のモチーフとしては同様であっても、施文の効果には差異が生じており、

細分する上での指針に置くことができる。また「雨滝式」は、大洞B・BC 式の問題として理解され勝ちであるが、同氏の大洞 C1 式の認定にも問題が存しており、同式を含む晩期前半の問題として再編成する必要があろう。

近年、炭素 14 年代法（AMS 法）を用いた年代測定研究が著しく進展しており、相当数のデータが集積されつつある。年代が測定された大洞 B1 ～ C1 式土器を集成した結果、晩期開始期である大洞 B1 式は、1950 年を起点として 3120 ～ 3050 年（^{14}C BP）、大洞 B2 式は 3050 ～ 2950 年（^{14}C BP）、大洞 BC 式は 3000 ～ 2900 年（^{14}C BP）、大洞 C1 式は 2900 ～ 2800 年（^{14}C BP）に相当し、オーバーラップしながらも、段階的な変遷が看取される。測定値を単純に差し引くと、約 320 年間の年代幅が見込まれ、筆者はこの間を 7 ～ 8 型式に細分したことになる。しかし計測値のばらつきが大きく、現時点では年代を絞り込むのは困難であり、大洞 BC 式や同 C1 式の細別を指示する有効なデータは得られていない。型式編年研究の細別レベルに、分析結果が到達していないのが実情であり、炭素 14 年代に対し型式編年研究側から是正していく努力が、土器研究者に課せられた課題となっている。

所期の目的として序章に 3 点を掲げたが、それ等に対する成果は以下の通りである。

①は本論の中核をなすもので、大洞B・BC 式の細別の確定化を目し、芹沢氏の「雨滝式」を否定することで通徹してきた。1985 年の岩手県曲田 I 遺跡の報告以降の当該期研究は、型式学的検討が等閑に付されたまま、出土状況のみが強調され、閉塞感が漂っていたように見受けられた。この状況を打開するため、多岐にわたる型式学的検討と、一括性の高い資料の検討に終始したのが本論の趣意であり、所期の目的はある程度果たせたのではないかと考えている。

②に掲げた広域編年網の構築に資する点については、他地域の編年研究の指標となるような明確な指針を提示することができたのかが課題となる。本論では、後期末葉～大洞 C1 式にかけての細かな変遷の階梯を示してきたが、東北全域に通有の編年の構築には至っておらず、課題を残す結果となっている。特に大洞 BC1 式や同 BC2 式終末段階は、東北北部においては設定されたが、東北中部では明確な型式内容を提示するに至っておらず、関東・北陸に隣接する東北南部については、殆ど手付かずの状況にある。

③に掲げたように、土器の持つ社会的、観念的、経済的な役割にも注目してきた。しかし本論では、十分な成果を挙げるには至らず、僅かに第 10 章の中で、北上川下流域の「入組三叉文高坏」を共有した地域社会を論及するに留まった。本論の中で指摘した地域的な纏まりや時間的な経過、地域間の交流といった問題が、いかなる社会の構造を反映したものなのか、更に研究を進めていく必要を痛感している。本論の中での検討は、社会的含蓄を深めるための基礎的作業であり、土器研究からの亀ヶ岡社会へのアプローチは、筆者にとって究極の研究課題となっている。

本論では、亀ヶ岡式土器を構成する多様な属性について、その消長を跡づけ、属性同士の対応関係や特定器種との結び付きといった規則性の追求を基本方針としてきた。上記した指針を踏まえて、亀ヶ岡式成立期の土器（大洞 B1 古式～ C1 新式）の特徴を簡潔に言い表すならば、以下の 4 点に集約することができよう。

(1) 精粗二様の土器の製作

(2) 多様な器種構成

(3) 精巧な造作と、闊達で華美な文様の発達

(4) 各属性の系統的な変遷

(1)にある粗製土器は、装飾性に乏しい深鉢形・鉢形土器に適用され、数量的には圧倒的多数を占める。晩期全般を通して、粗製深鉢形土器が日常的な器種として多量に製作・使用されており、施文原体や口端・底部の作出手法等から、地域的差異が指摘される。一方、精製土器は比率的に少なく、実用的な器種ではなかったと判断される。また、縄文施文のみの壺を「粗製壺」に含めたり、体部文様帯を欠く台付鉢等を「半精製土器」に含める場合もあるが、半精製土器は大洞BC2式以降に顕在化する器種と見なすことができる。

(2)の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器（台付を含む）、浅鉢形土器（台付を含む）、皿形土器、壺形土器、注口土器、香炉形土器の7器種を基本とする。型式によって構成要素の比率に変動が見られるが、上記した構成は、注口土器が器種として独立した大洞 B1 新式にほぼ確立する。このうち皿形土器と香炉形土器は一般的でなく、後者は大洞 C2 式で姿を消す。浅鉢形土器に包括される椀形土器は、大洞 BC2 式になって新たに加わる器種であり、同C1式に盛行する。また半精製の片口形土器も、大洞BC2式期に明確化し、同C1式で姿を消す。

また装飾土器の内、主要器種が型式毎に変化していることも、亀ヶ岡式土器の特徴として指摘される。晩期前半を通しては、注口土器（大洞B2～BC2式）が一貫して主導的位置を占めるが、大洞B1古式では装飾深鉢、同B1新式では装飾深鉢・鉢・浅鉢、同B2～BC1 式では装飾鉢・浅鉢・装飾壺、同 BC2 式では装飾鉢・浅鉢・装飾壺、同 C1 式では装飾鉢・浅鉢・椀形が、主要器種（いずれも台付を含む）に加わっており、深鉢形土器→鉢形土器→浅鉢形・椀形土器と時期を追う毎に、主要器種の低平化の経過が看取される。

(3)については、精製土器に適用される。土質緻密、薄手で一般に小形に傾き、器面の調整は縄文のない部分においては甚だ良好で、通常滑沢に富んでいる。文様は闊達と形容されるが、施文手法は規則性を有しており、複数の文様要素で構成される場合も少なくなく、文様の組み合わせは型式毎に異なっている。大洞 B2 式では入組三叉文が口頸部の主要な文様、同 BC 式では羊歯状文が（口）頸部の主要な文様、同 C1 式では雲形文等の磨消文様が体部の主要な文様として展開する。体部の曲線的な磨消縄文を構成する半肉彫的手法は、大洞 BC2 ～ C1 式に盛行するが、母体となる菱形・矩形の磨消文様は、大洞 B2 式の鉢形土器の体部文様帯（Ⅲ文様帯）として現出し、同BC1式に継承される。

(4)の系統的な変化は、装飾帯・文様帯だけではなく、種々の属性の消長にも関わっている。亀ヶ岡式土器は多様な属性から構成されており、それぞれに生成・変遷・消滅の過程が看取され、複数型式にわたって存続するのが通例である。一つの属性が単一の型式を区分するメルクマールとはなり得ず、複数の属性の組み合わせから型式の判別が求められる。筆者は上記した理解に立って、種々の属性の跡づけを試みてきたが、亀ヶ岡式土器の系統性を持った変遷観は、山内清男氏の当該土器研究の根幹であり、今日においても重要な指針となっており、その発展的継承に努めてきたのが本論の骨子である。

本論は、筆者の亀ヶ岡式土器研究のこれまでの成果を纏めたものである。土器型式の検討に終始したため、冗長で纏まりを欠く拙文になってしまったが、現時点での筆者の理解の到達点を提示したつもりである。型式学的検討では、恣意的な資料解釈の存したことも

否めず、今後出土状況に基づく検証が求められるが、本論に示した編年試案が今後の当該期研究の中で叩き台となり、斯学の発展に少しでも資することがあれば、著者として望外の喜びである。